

人間性を磨き合う学級

Class Room Management Based on Human Education

赤坂 雅裕*

Masahiro AKASAKA

1. はじめに

「ゼロトレランス」という方法をとれば、中学校でも「荒れ」は一時的におさまるかもしれない。しかし、根本解決にはならないであろう。

やはり、これから、中学教師が行うべき指導は、学級の生徒一人ひとりに気を配り、その内面にまでかかわろうとする「きめ細やかな指導」である。学級の生徒一人ひとりの内面性を育てる「人間性を磨き合う学級」である。

そのなかで、極端な自分勝手主義の生徒の向上の変容を目指し、「だらしない収容所」の統制を図っていくべきである。

「人間性を磨き合う学級」をつくるためには、以下の4つを行わなければならない。

1. 支持的風土をつくる。
2. 規律を確立する。
3. 「あこがれ」を見だし、磨き合う。
4. 「できる自分」を実感する。

以下に、「人間性を磨き合う学級」をつくるための4つの要点について概説する。

2. 支持的風土をつくる

人間性を磨き合う学級をつくるための1つ目の要点は、担任教師がリードして、生徒と共に、学級の中に、認め合い、支え合い、励まし合うという、何とも言えない、あったかい支持的風土をつくることである。

学級の中のどの子の人権をも尊重し、どの子にもある「よさ」(可能性)を引き出す。そのために、以下のような学級をつくる。

- ①「自らに厳しく、友には思いやりを」という心がけを持つ学級
- ②お互いの個性や特徴を認め合い、支え合い、励まし合うことができる学級
- ③学級みんなで協力し、工夫し、創造の喜びを感じることができる学級
- ④まちがいやつまずきを恐れず、みんなでそれを大切にしていける学級
- ⑤対立があっても、建設的に解決していく学級
- ⑥子ども一人ひとりの心のよりどころとなり、支えとなる学級

このような学級をつくれるかどうかは、実は、教師の基本的な教育観と関係する。無意識のうちに、教師の言葉や態度は、その教師の教育観を伝え、学級の風土をつくりあげていくからである。その風土は、「教師の姿勢」などで意識的につくりだすことができる。

(1) 教師の姿勢

①包み込む

人を教えるという教師に、絶対必要な心構えがある。それは、学級のどの子も丸ごと受け入れるということ。どの子にも温かく接し、包み込めるということ。

中学3年ともなると、「うぜえ、死ね！」など

* 文教大学国際学部准教授

と教師に暴言を吐く子も出てくるが、そういう子をも、なお受け入れ包み込む。その大きく温かい教師の心が伝わった時、はじめて子どもは心を開き、別の表情を見せてくれる。それを見ている、学級の他の子どもたちも変わり始める。

②和顔愛語（わげんあいご）

仏教の教えで、おだやかな優しいお顔で、愛の言葉、思いやりのある言葉を発するという意味。教師は、いつも、自分の「まなざし」と「言葉」に注意していなければならない。

疎外されがちな子を、学級が大切にしないかの決め手は、担任の日常の言動にある。人からバカにされ、嫌がられているような子にこそ、担任の優しいまなざしと温かい言葉が必要である。

③「この子がいてくれるおかげで」と位置づける

中学生が、今、一番求めていることは、実は、生徒一人ひとりの内面のつぶやきやうめきを親身になって聴き取り、共感し、一緒になって、問題の出口を探し、問題打開の糸口を示唆してくれる人がほしい、ということであろう。「うるせえ。おめえには関係ねえ！」などと虚勢を張っている生徒も、心の奥底では、先生の力を求めている。

言うことを聞かない、どんなに大変な子でも、「この子さえいてくれなければ」とは考えない。「学級のドラマづくり」の大切な大切な登場人物として位置づけてしまう。

「この子さえいなければ」ではなくて、「この子がいてくれるおかげで」という位置づけに変えていく。

④いじめられている子の側に立つ

学級には、様々な子がいる。家庭の事情で、なかなかお風呂に入れない子や、服を洗濯できないという子もいる。そういう子は、梅雨の時期などは、汗のきつい臭いがすることもある。

そういう子がいる場合、その子の悲しみを察し、担任が優しく一緒になって清潔になるようにしてあげたい。学年の他の教師や養護教諭にも応援を頼み、静かに見えないように、その子が清潔になるようカバーしてあげる。

不潔だったのが清潔になった、こざっぱりしたということになれば、他の生徒からのかかわり方も随分違ってくる。

以上のような、担任教師の姿勢から感化を受け、学級の子どもたちや学級に、以下のような態度や雰囲気生まれてくる。

もちろん、直線的になることはない。また、逆行することもある。しかし、1年間をかけて、小さな輪が少しずつ大きくなるように広がっていく。

【個々人の態度として】

- ・友の発言や行いについて、友の身になり、友の立場に立ち、友の考えをくみとる。
- ・どんな人も、バカにしたり、笑ったりしない。人に優しくなる。
- ・友の発言や行いに、どこかよいところはないか探す。
- ・友に注文するときは、友を攻めるのではなくて、穏やかに自分の考えを示す。

【学級全体の雰囲気として】

- ・あったかい、しっとりとした雰囲気
- ・明るく楽しい雰囲気
- ・しかも、何か一本「はり」のある雰囲気

(2) 支持的風土をつくるレクリエーション

担任教師が、喜び、感謝、感動などを教室で素直に言葉に出していると、教室は、いつしか、温かい、なごやかな雰囲気になる。生徒のやる気やエネルギーも、自然と生まれてくる。この教師の生きざまからの感化はきわめて重要であるが、それだけでなく、学級活動のなかで、レクリエーションを意図的・計画的に行っていくことによって、支持的風土をつくりあげていく

ことが必要である。

中学生でも、子どもはみな、自分のクラスを明るく楽しい学級、温かい雰囲気、学級の伸び伸びと勉強のできる学級、にしたいと望んでいる。そのような学級の風土を、まずは、お互いに知り合い、友だちになるというレクリエーションからつくっていく。

①初期のゲーム【級友と楽しむ：交流し、心をかよわす】

- ひたすらジャンケン
- ジャンケン列車
- フルーツバスケット
- ネームゲーム
- 2人で握手、見つめ合い
- ぐにゃぐにゃだらり
- じゃんけんおんぶ
- あいさつゲーム
- 私は鏡
- 犯人はお前だ
- 親切カード
- 幸せを運ぶ手紙
- 花見昼食会 など



【握手、そして見つめ合い】

身体運動反応や発声などの反応で、出会いの不安や緊張を解消する。入学直後の中学1年生には特に有効。フルーツバスケットなどは、中

学3年生でも用いることができる。

これらのゲームを繰り返すことで、受け入れに関する不安が解消し、自由に級友と交流することができるようになっていく。

②発展ゲーム【級友と協力し連携する：協力する。役割分担し連携する。折り合う】

- 凍り鬼
- 人間知恵の輪
- 人間いす
- 新聞紙タワー
- 4面ドッジボール
- 集団絵画
- 頭をゆだねる
- ブラインド・ウォーク
- ソーシャル・シルエット
- 手型・足型
- 大なわ など



【みんなでジャンプ】

「級友と安心して交流できる」ということを基盤として、「心をかよわすゲーム」や「協力するゲーム」を加えていき、級友と楽しむ経験や協力する経験を積んでいく。

級友と協力し楽しむ経験を繰り返すことで、学級内での人間関係への自信が高まっていく。お互いの「よさ」を認め合い、「弱点」は支え合い、励まし合っていくという支持的風土も醸成

されていく。

級友の思いやりや親切に気がつく、級友を信頼する気持ちがわいてくる。級友から信頼されると、信頼に応えようとする責任感も生まれてくる。肯定的な自己概念も芽生え、学習面でも生活面でも、意欲的に取り組み、「頑張っている」という姿勢を見せてくれるようになる。

3. 規律を確立する

人間性を磨き合う学級をつくるための2つ目の要点は、学級の中に、担任と生徒で規律を確立することである。人間が集うところには、必ず、規律（ルール）が必要なのである。

「相手」のことを守り、「自分」のことを守るためである。ルールがなく、各人が好き勝手に行動しているということほど不自由なことはない。各人が好き勝手に行動すると、結局「マイナス」が多く、幸せな生活は送れない。

担任は、クラスの全員が共有できる目標をつくらなければならない。そのためには、まずは、担任自身が、どのようなクラスにしたいのか、はっきりと心に考えを持つ必要がある。担任が求める学級像を描き、それを、クラス全員のものにしていく。

(1) 叱るポイントを明示する

私は、学級開き後3日以内に、私の叱るポイントをクラス全員の前で、はっきりとした声で伝えた。

「先生がみなさんを叱る時を覚えておきます。先生が叱る時は、①いのちを粗末にしようとした時②人として恥ずかしいことをした時（卑怯なふるまい・傲慢な態度）、の2点です。

みなさんは、『自分はいのちを粗末にしているか?』『今していることは、人として恥ずかしいことではないか?』といつも考えて行動するよう、お願いします。

この2点に関しては、先生は断固として叱りますので、覚悟しておいてください。」

以上のような、「叱るポイント」を学級開き後3日以内に明示することが重要。

4月の初め、新入生はもちろん、中2でも中3でも、いつもより緊張して静かである。新しい担任、新しい仲間期待と不安の気持ちが交錯している。この時期なら、担任の言うことを普段より素直に聞くことができる。この間に、「してはならぬこと」を生徒の心に刻みつけるのである。

なお、ルールは、できるだけ少なくすること。かつ、単純にすること。ルールをクラス全員のものにするためである。

(2) 学級目標を共につくる

4月の中旬、おそくても下旬には、以下のようにして、「わが学級の規律」を生徒と共につくりていきたい。

オレたちだけの学級目標

①体と心にふれあう

「いきなりですが、今日は先生とジャンケンします。ハイ、全員起立！負けた人は座ってください。さあ、だれが最後まで残るかなあ？」とびっきりの笑顔で、学級活動をスタートさせます。

「おお、男子が2人、女子は5人。やっぱ、女子の方が強いねえ？」おどける私に、「あったりまえよ！」と女子。「しかたないね」と弱々しい返事の男子。「こりゃ、イカンばい」ずっとける私に、今度は学級みんなでワッハッハ。

そして、最後まで勝ち残った女子に聞きます。

「ハイ、あなたは今日のスーパースター。この学級がはじまって2週間経つけれど、その中で、“良かったなあ”と思うこと、1つだけ言って下さい」

「えっと、この前の大なわで私がひっかった時に、〇〇さんが私のことを心配してくれて、その時、とても嬉しかったです。ありがとう」

「そう、そんなことがあったんだ。いいねえ。」

なんか、うれしいねー。じゃあ、スーパースターの列の人にも同じ事を聞きましょうか」

「優しい人が多い。勉強がわからない時、教えてくれた。」「エッ、誰が？」

「〇〇さんが、数学の問題を・・・」

知らなかったことに、友を通して気づき、驚きながらも、あったかい雰囲気では進んでいきます。レクリエーションを楽しみ、互いの体と心に十分ふれあった後、「じゃあ、残りの時間で、出てきた意見をもとに、2週間のなかで、良かったことと、今後学級として頑張りたいことをまとめてみましょう」と指示。

②学級目標づくり

4月の下旬までには、「私たちの学級は、こんな学級にしたい!」という全員の心をひとつにする学級目標をつくりたい。どういう目標がいいか?

- ・生徒と担任の願いを重ねたもの
- ・生徒が納得する、身近なもの
- ・具体的な行動目標を入れ込んだもの
- ・「まじめ」に照れを感じる中学生という発達段階に応じたもの
- ・少しは、知的な香りがするもの

が、いい。どうやって作るのか?

まず、2週間の振り返りを行う。先に述べたように、楽しく行い、「良かった点」と、「これから頑張りたい点」を考えさせる。その結果を翌日、学級通信で発表する。

そして、「我ら、“あったか炊き込みご飯”になる! (一人一人の個性が認められ、生かされ、協力して、熱く物事にぶつかり、みんなを幸せにする学級という意味)」等の参考になる学級目標の例を紹介して、宿題を出す。「いつまでも忘れることのできない『オレたちだけの学級目標』を作っちゃいましょう!」と。

翌朝、宿題の中から、担任が5～6つ程、優秀作を選び、発表する。優秀作に込められた願

いをわかりやすく解説した後、生徒にどれにするか決定させる。

2007年度の私の学級(受験を控えた中学3年)の学級目標は、以下のようになりました。

- ①笑いの絶えない温ったかい3の1
- ②1492(意欲に)燃える3の1
- ③何事にも立ち向かう強い3の1

そして、この目標を下の写真のように、班ごとに「リレー習字」で書き、教室全面に大きく貼りだしました。



③学級愛称づくり

学級目標の次は、学級の愛称づくり。学級目標を踏まえた、学級のニックネームを考えてもらおう。学級目標づくりと同じ方法で作っていく。

ニコニコ
 勇気100倍2525赤花フレンド学級
 (24名+先生)

「クラス24名全員がそろい、担任である私と25名になれば勇気100倍。どんなに苦しい時でもニコニコ笑顔を絶やさずに、フレンド(仲良く)がんばり、困難に立ち向って、自分たちの情熱の赤い花を咲かせる」という意味を込めて作ってくれました。

④学級歌をつくる

さらに、この延長として、学級目標をもとに、学級歌や学級旗をつくる活動を仕組むといい。以下のような学級歌をつくってくれたことがある。

- 1 一人ひとりを思いやる学級にしようよ
そこからみんな仲良くなれる
A K A S A K A学級
 - 2 何にでもベストをつくす学級
1の1ならやれるよ
落した涙をバネにして・・・
(タッチの替え歌で)

これらを朝の会やふれあい合宿などの行事で活用する。「我が学級の規律」の共通理解が図られ、学級としてのまとまりもグーンと強くなる。

4.「あこがれ」を見だし、磨き合う

人間性を磨き合う学級をつくるための3つ目の要点は、生徒が本心からの「あこがれ」を見だし、それを学級のなかで、磨き合い、高め合うよう、指導していくことである。

(1) 自己主導的、自己発見的な学習を

人は誰でも、人から言われたのではそれほどやる気になれないが、自分で考え、自分で決めたことには、やる気が出る。中学生の時期は、周りに対して特に素直になれない時期であるから、自分自身の良心から湧いてくる意識によって自らを律していくよう指導していくべきである。

罰則や禁止事項でがんじがらめにしぱりつけて、それを点検追及の監視体制のもとで守らせるという方法では、中学生は、殻に閉じこもるか、反抗するか、になる。それでは人間は育たない。中学校の教育の場での規律は、一人ひとりの生徒が自発的に自主的にこうしようということから、出発すべきである。

教師が叱ったり、説教したりするよりも、中学生の場合、子どもが自分で自分の生活や学習の態度を見直す方が、はるかに子どもを自律的にさせる。

中学生を信頼し、中学生が、自分の本心からの「あこがれ」を抱くよう指導していく。そして、中学生がその「あこがれ」で、自らを律し、自分を向上させていく。そういう自己主導的、自己発見的な学習を促進していくのが、中学生に最もあった指導方法である。

では、思春期の中学生が、自分の本心からの「あこがれ」を抱くようにするには、どのような指導を行えばいいのか。

(2) 中学生が「あこがれ」を見いだす道徳授業

以下のような工夫をし、「中学生の心に響く道徳授業」を行えば、それは可能である。

- ①「ほんもの」に出会わせ、道徳的価値を感動的に学べるようにする。
そして、本人が心から納得し、価値を自ら内面化するよう支援する。

そのための最大の工夫として、2種類の授業を行う。

1時間の授業で1つの価値について学ぶ、従来の「価値の内面的自覚を図る道徳授業」も行う。(これが道徳の基本的な授業)一方、1時間の授業のなかで複数(3～10程度)の価値に出会い、そのなかで自分が一番感動したものを選択し、その感動を伸び伸びと表現する授業、「価値の覚醒を促し、磨きあい高めあう道徳授業」も行う。

なぜか。中学生(特に中学2年生以上)には、原理・原則を「注入」し「叩き込む」、あるいは「理解」させ「分からせる」という授業より、中学生自らが、原理・原則をつかみ取っていくように支援していく、そういう授業の方が有効であると体験的に学ばされたからである。

前者の授業が必要な場合もあるが、基本的に中学生は、その授業を嫌う。教え込まれることがイヤなのである。なかなか素直に受け入れようとはしない。よって価値の内面的自覚化は図られない。

一方、後者を優先させ、一人ひとりがつかみ

取った「価値観」を学級のなかで磨き合わせ、高めあうようにしていく授業は、中学生の心に響き、その心を打つ。生徒を受け身ではなく、学習の主人公の立場に立たせる。そして、学級のなかで協同の学びを展開させていく。こういう道徳授業には、中学生が集中し、その学びは広く深くなっていく。

この2種類の道徳授業を生徒の実態に応じ、バランスよく行うことが重要。

どのようなバランスで行えばよいか判断できるのは、学級担任。

よって、学級担任が道徳の授業を行うのがベストである。

なお、中学生は、「自分と共感するもの」「自分がもっているものより一歩進んだもの」と出会うと感動し、価値の内面的自覚化を図る。中学生をよく観察し、資料を徹底的に精選すること。次に、資料を与えるタイミングを考えること、が重要となる。

具体的には、以下のような授業を行う。

- ・詩人に学ぶ道徳授業（東井義雄・坂村真民・相田みつをなど）
- ・芸術家に学ぶ道徳授業（ピカソ・ベートーベン・ゴヤなど）
- ・文学作品（作家）に学ぶ道徳授業（森鷗外・芥川龍之介・太宰治など）
- ・歴史上の人物に学ぶ道徳授業（伊能忠敬・ガンジーなど）
- ・スポーツ選手に学ぶ道徳授業（イチロー選手・オリンピック選手など）
- ・先輩や身近な人に学ぶ道徳授業（先輩の後ろ姿・親の手紙など）

②自己の価値観を表明し、級友と認めあい、磨きあい、高めあうよう支援する。

授業の終末で、それぞれが心ひそかにそっと決意したもの（この主人公のようになりたいな。こんなふうに生きたいな一等）を必ず書か

せ、それを学級通信で紹介し、共に学びあえるようにする。

担任教師のことをすべて否定する中学生でも、級友全員を否定したりすることはない。級友の考えには耳を傾け、受け入れ、そこから、自分の生き方を模索し、「あこがれ」を見出そうとする。道徳の授業を終えた翌日の帰りの会で、級友の考えが載った学級通信を読み合う。配布した瞬間、シーンと静まり、パッと「笑顔」が現れたり、「おうー」というどよめきが起こったりする。クラスの仲間から、「人間」を学んでいる。

自己の内側にある原理（自己の良心）に従って行為することができる能力のことを、内的道徳性と言うが、以上のような道徳授業を行うと、生徒の内的道徳性を高めていくことができる。そして、生徒は、自己の良心に基づいて自らを律し、自分を向上させていくことができるようになっていく。

(3) 中学生に出会わせたい「ほんもの」

道徳教育は知識の教育ではないが、知ることを抜きにして、「どう生きることがいいのか」のよい判断を行うことはできない。知ることを抜きにした心情の陶冶は、独りよがりの勝手な行動を生むことにつながる。ゆえに、これから紹介する詩のような「真実」と出会い、人間のあり方・生き方を知る、学ぶということが極めて重要になる。

この学びが根本である。そして、そういう「真実」に出会って、自己と対話をする。授業の終末で、グッと自己を見つめさせ、生徒一人ひとりが本心からの「あこがれ」を見いだせるよう指導していく。

私は、以下の東井義雄氏や坂村真民氏、相田みつを氏、星野富弘氏、松下幸之助氏、須永博氏などの「詩」を、子どもたちに出会わせていた。

『東井義雄先生 人生の詩』野口次男編 御
幸印刷 より

- 根を養えば 樹はおのずから育つ
- 九（苦）をのりこえなければ 10のよろこびはつかめない。
九九を通らなければ 100のしあわせは得られない。
- ほんものはつづく つづけるとほんものになる。
- おなじ自分の手なのに 右手と左手のちがいは
いっとうやって できたのだろうか。
やっぱり右手は 不斷の努力によって右手を 創ったのだし
左手は左手になる道しか 歩まなかったんだね。
- ほめてもらうことも 礼をいってもらうことも あてにせず
ただよろこんでもらうことを よろこびとして 生きる生き方
- 失敗しないこともりっぱだが 失敗をプラスにかえて生かすことは
それ以上に りっぱだ。
- どんなにつらくても さじを投げることだけはすまい。
なにくそと自分に鞭（ムチ）をあてて がんばろう
「朝のこない夜はない」

『坂村真民詩画集2』 鈴木出版 1985年
『しんみん山の本』 春陽堂書店 1994年
より

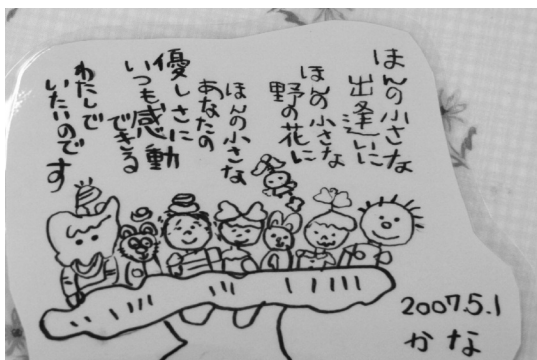
- タンポポ魂
踏みにじられても食いちぎられても
死にもしない 枯れもしない
その根強さ

そしてつねに 太陽に向かって咲く その
明るさ
わたしはそれを わたしの魂とする

- 尊いのは足の裏である
尊いのは 頭ではなく 手ではなく 足の裏である
一生人に知られず 一生きたない処と接し
黙々として その努めを果たしていく
足の裏が教えるもの
しんみんよ 足の裏的な仕事をし 足の裏的な人間になれ
- 光と闇
光だ 光だ という人には いつか光が射してくるし
闇だ 闇だ という人には いつまでも闇が続く



【相田みつをさんの字を模写】



【須永博さんの作品を模写】

5. 「できる自分」を実感する

人間性を磨き合う学級をつくるための4つ目の要点は、生徒が「できる自分」を実感できるよう支援していくことである。学級活動や学校行事の中で、「できる自分」を実感することができると、自尊感情や自己有用感が高まり、自分に自信を持つことができる。

「自分はやればできるのだ」という自己への信頼、これがあれば、彼が抱えている「あこがれ」は実現する方向へ力強く進められていく。

(1) 誰もが主役の集会活動

生徒が「できる自分」を一番実感するのは、勉強がわかった時や成績が上がった時。ゆえに、教師は、教科の授業実践に最善を尽くすべきである。しかし、それだけでなく、合唱コンクール等の学校行事や集会活動（学級集会・学年集会）にも力を入れ、「自分の考えを自分の言葉で表現することができた」「人と話し合い、協力することができた」「人のために役立つことかできた」等を体験し、「できる自分」を実感できるようにしていく必要がある。「練習すれば、努力すれば、自分はできるんだ。自分は能力はあるんだ」ということを一人ひとりが実感できるよう支援し続ける。

私は、毎年、以下のような学級（学年）集会を実施していた。

- ・「私のお薦め本」紹介集会
- ・「坂村真民の詩を暗唱するぞ」集会
- ・「20分座禅にチャレンジ」集会

(2) 笑顔で「食」に取り組む

「行事が多すぎて、振り回されています」と嘆く教師がいる。本音なのかもしれませんが、はたしてそれでいいのか。私は、世間の、「学力が低下している」という声に押されて、現在、特別活動の量的な絞り込みが行われていることをたいへん懸念している。特別活動が絞り込まれると、学校生活の楽しみやリズムが失われていく。学校から心や社会性を育てる訓育機能も弱くなる。

そして、学習への負担感のみが強まり、不登校などの問題がより増加していくのではないかと危惧している。

学級独自でも「行事」をもっともっと創りあげてほしい。クラス全体が取り組む、集会、文化、スポーツ、レクリエーションなどの活動の中で、子どもは生き生きと動き、鍛えられていく。子どもたちが存在感を与えられるようなさまざまな場を、担任がもっともっと教室の中に作るべき。すべての子どもが活動できる場が作られてこそ、しかも、楽しい場が作られてこそ、子どもは動き、学び、自己を高めていく。

私が最後に勤めた中学校では、私は食育を進めていく必要性を強く感じていた。たとえ親が何もしてくれなくても、自分で朝食をつくり、食べ、自分で自分の健康を守る。そんなたくましい子どもに成長してほしいと願っていた。そこで、学年の家庭科の先生を中心に学年の教員で力を合わせ、「食」に関する活動を特別に実施していった。

「目のまわるように忙しい毎日」ぐらいでちょうどいい。忙しければ忙しいほど、教師も生徒も力を出さずにいられない。力をあわずにはいられない。そして、仲間の新しい面がいっぱい見えてくる。「ああ、今日もたいへんだったけど、おもしろい一日やったなあ」。こういう声が聞こえる学級でありたい。

(3) 教師の喜び・感動を伝える

担任が、生徒一人ひとりの活動を温かいまなざしで見つめる。そして、その「がんばり」や「向上的変容」を見逃さず、全体の場でほめる。また、その成長の足跡を学級通信に文字や写真として残し、保護者にも伝えていく。このような担任の働きのおかげで、生徒は、「できる自分」を実感し、自尊感情や自己有用感を高めていくことができる。

「人間性を磨き合う学級」において、「学級通信」は決定的な価値を有する。学級通信がないと、教師も子どもも、日々の重要性を見過ごし

てしまう。ただ慌ただしく時を過ごしてしまう。平凡な学びの日々に、子どもたちが充実感を味わい、かつそれを通して「人間とはどうあるべきか」を学んでいくには、どうしても「学級通信」が欠かせない。

「学級通信」という日本教育界の誇る伝統の技を私たちは是非とも引き継ぎ、発展させていきたい。

【参考文献・引用文献】

- 東井義雄『子どもを見る目 活かす知恵』, 明治図書出版, 1986.
- 片岡徳雄編著『個を生かす学級づくり一問一答』, 黎明書房, 1978.
- 向山洋一『子供を動かす法則と応用』, 明治図書出版, 1984.
- ハツ塚実『ドラマのある中学3年の学級経営』, 明治図書出版, 1987.
- 児島邦宏『教師のパフォーマンス』, ぎょうせい, 1991.